



心電のむち 下

中村俊定文庫
文庫 18
133
2





鳥之道集卷之下

元禄七年六月廿日

大津本篇菴より

公羽

秋ちの葉んまふや四五月
志とるふゆきまの
月残るあふきの大親打海

木篇

惟然



起るとは下る志しき事
傳まじき丸雪みよの一本
手のひらぬいし糊さく次
夕食をくはて隣の猿を待
たせれば母志小ぬ大さし
宿して吐のかさる噴吐海
くらしき蚤乃ちひらぬ
佛壇の障子二月のさしか
然

標かきりしおりの抄をせ
ハ翔乃礼をせしは道なり
舟荷の籠乃はふさるる
西宮の地早まぬ此の所
持あまの醫考乃る茶
流うけぬ細根をぬ花の地
豆袋めしき事とをけし
年既うらひさ記やし供
翁

舟の記

二

陽正のまよりをさかす(さく) 希
水煙志とよき向き類つ化 然
吾に琵琶をこいふことと墨 翁
才都ハ四面するをよとやに 考
竹の根をゆき水乃さく(く) 然
志ましくと京への枇杷を食す 吾
塚とむをめよとらる(ら)をこく 考
空を踏さむ(む)てこたふる男雄の 翁

歪にまねき(き)るものさうけ(け)なわ 吾
髪踏く番(ばん)うおる日(ひ)れお月(づ)状 然
木(き)十(じゅう)ろ(ろ)を(を)梯(はし)を(を)ま(ま)し(し)な(な)む 翁
浦(うら)池(いけ)中(ちゆう)宿(しゆく)仕(し)あ(あ)ら(ら)て 吟(ぎん)祭(さい) 考
桶(ぶく)もた(た)ら(ら)い(い)も(も)あ(あ)り(り)し(し)泥(どろ)竹(たけ)端(は) 然
投(な)う(う)ち(ち)を(を)さ(さ)つ(つ)れ(れ)て(て)猫(ねこ)の(の)迹(あと)あ(あ)る(る)地(ち) 吾
背(せ)よ(よ)その(その)と(と)う(う)ち(ち)掃(は)除(じゆ) 日(ひ) 考
花(はな)吟(ぎん)中(ちゆう)茶(ちや)摘(てき)功(こう)よ(よ)裏(うら)志(し)山(さん) 翁

花吟中茶摘功よ裏志山

三

はしらの肥新赤土乃岸 然

志はしとをきみを月の光に

土芳

こゝのまはらに秋空の芳お

玄柳

栗解乃いれおれおふさうり

猿雖

言ふれやうな人のあつまを

雪芝

長持の扱束を物と指をさ

苔蘚

つほとほふ風を添ぬ

百年

竹垣の他アを〜しきる者け卓袋
 をいふ一陽をあひのい〜
 う想ととれ人よ志くさぬ物書
 前髪ゆへう散るゝあゆり家
 有明のあけも吉れ物と毎
 後しを越る六田の戸道
 菊合の荷を解分る持を達
 候乃かきむと女子来ると
 袋 午 菴 芝 瓶 板 芳

戸の口を仕四ふ〜り妙清是
 浪うらあつる散るをき〜
 花の比初終をらん候〜
 素ほ〜〜案本を声る〜やめ候
 ナ
 他人よりて志ん〜りとせぬ
 片編み足る〜立寄る隣れ家
 出るあ〜先へ石サ 芳
 芳 午 菴 芝 離 梅 芳

空をきくると大勢吹比料理の
 あらうよまの〜 結実さる也 雖
 色し〜とむ〜か〜唱あは
 一なまののあれ事名所 蕪
 傘子を産乃おと〜引かけ 午
 水汲こむあ花ま〜戸立る 袋
 衣草た〜ま〜思の月れ就 芳
 引板こま〜さむあ〜乃春 梅

火のほろ〜と火権〜林より流 雖
 袋〜い〜つと小判仕分る 芝
 塩切〜と花ま〜る花師の青苞 蕪
 大敵乃方をたやい〜る六つ 午
 行りも〜とゆり好か〜る花咲〜 袋
 柳〜と〜とま〜つ〜葉本〜り季 蕪

日蓮の場をそめぬや初まよ

初行

引ハかろの活此子阿多

舍羅

まやくと少く雪の起るまで

何中

よひ及つれどきを及るゆ

羽竹

二割方屯切こちり姫くは

其道

當りまの待り清書く強る

芙蓉

初行の巻

上

初行の巻

上

接抄も念佛海の巻にレ池ノ因之
 を紀とレ海ノ吹ハ葦ノ子ノ千百
 塘ノこノきヲおほキ兼テ葦ノもノ独ノ法ヲ
 何ノあラハシ何ノ派ノへシてハいハ日ノ紀ノりハ
 娘ノをレのレ纏レ糸ヲつキありシ何ノ羅
 初ノ尾ヲとシてハいハいハぬルなりハ何ノ中
 かキひシとシ船ノ場ノの色此ノ増カ也ハ何ノ竹
 一ニ通シてハ大ノ根ノ兼テあテりハ其ノ道

不レ法ヲまシるノ余ノとシてハ見レ西ノ海ノをレ
 眠レとシきケたル有ル明ル乃シ月ノ因ニ之
 砂ノ畑ノりハ仕ノ事ノの分もハたカとシ也ハ千ノ百
 いハ川ノの月とシやハ所ノとシかシるノ葦ノ知ノ外
 あレ人ヲをレ久シくシぬル日ノにハたシれハ帆ノ竹
 浪ノをレ起シてハ疾クなリてハいハくシ也ハ舎ノ在
 初ノもハ好シくシてハいハくシとシ降ルてハいハ日ノ和ノ何ノ中
 談合事トもハ是ノ事ノをレ論シ也ハ取ノ竹

ちの比無思の心は八懐 其乃
 今朝をたふして酒はまかぬ 芙蓉
 世理なりと名をけきき 萩原 因之
 えんしよふれはるるわらと 千首
 あふしと何あはきき月あたる 新井
 七のねをまはききぬ我三株 似竹
 とやあそく白知あはるさう也 金羅
 つもも金よは乃とくち 何中

濁^ウりそるもく記きく海と舟戸 羽竹
 三日けりき、書をぬまけり 其乃
 いやあぬもあまらうまし池邊水 芙蓉
 知てなひかきを院授ととむ 因之
 い花もくやさうわれば比のそれ好 千首
 うを脱^脱さや暖なそら 知那

口切比了侍里し

風烟

紀の園若宿乃りりあ仙花

これかとおける初ま乃りき

壺中

呼ぶ声此とけし袖の向

泥豆

わげきところ乃おほき土摺

去來

おあけき有もこゆる七月此月

野明

先子此衆やう揃ふ秋う勢

芦角

下

下

為事とてとほり命をいひ合せ 野童
 佐てくく珠こ押もくこれと 冥
 これ易き松の志くしととあり 文中
 い川もの多にやうも織のつく 惟然
 け月れ精進も走つして仕舞 舞
 あてりぬく二室もるんく言 川風
 遊く上林のたまりれ友も此も 去来
 男もとまきくにはやれ 剋 浪息

皆声れをぬてをれぬ室さく 苦角
 えよこのくそ精を 出さく 野明
 ろんまりと目と花もはあり色 野童
 かこの子にはもゆるのけらふ 文中
 東郊屋もあけくまてまふまき 冥夕
 今朝をとるけき脱馬くなく 去来
 大切なるも人の子もくせ 川風
 亡きれものもあまきくを責ん 苦角

川幣之乃まぬまかゝや柳

正秀

日きちりく秋菜ひろる

探芝

打也乃客を湖まきあに

游刀

いよまを志川と八片隔よつむ

昌房

月生ぬまあゝまを記擧らる

芝

志くくむの息けひく

秀

早稲も能^能れ納^能り^能る^能所^能は^能り
 多^能指^能の^能碩^能乃^能筆^能の^能極^能ま^能れ
 小^能切^能月^能も^能ん^能々^能々^能娘^能れ^能を^能思^能は
 そ^能ら^能け^能て^能お^能の^能一^能板^能本^能乃^能宿
 焚^能櫃^能の^能く^能ま^能ふ^能忌^能ま^能も^能取^能ら
 片^能も^能あ^能き^能ほ^能の^能や^能ら^能ゆ^能や^能ら
 む^能れ^能く^能と^能う^能勢^能記^能の^能康^能々^能う^能ら
 め^能る^能て^能杭^能も^能深^能き^能こ^能も^能一^能

房 刀 秀 房 芝 秀 刀 房

あり^能由^能なる^能身^能ま^能月^能ま^能ら^能う^能と^能起^能出^能
 酒^能手^能乃^能加^能増^能水^能ま^能れ^能い^能き^能ら^能し
 帰^能る^能へ^能さ^能支^能さ^能度^能ま^能ん^能ゆ^能ら^能花^能心
 あ^能き^能く^能れ^能ま^能さ^能八^能解^能あ^能ひ^能衣
 以^能て^能の^能浮^能比^能坂^能ら^能繰^能く^能ま^能の^能危
 蘇^能た^能ら^能ま^能の^能た^能の^能ま^能れ^能を^能世^能也
 か^能そ^能つ^能ま^能て^能さ^能と^能毎^能宗^能を^能流^能敷^能
 婦^能ら^能れ^能一^能踏^能を^能比^能に^能ま^能け^能ら^能り

芝 秀 房 芝 刀 房 秀 房 芝

ものたひひもつんまやしきり
 壁う遠きあきうはの花
 小國の終るまほへは海をさし
 月えの友れいつきるるう角
 ちつたれ種うたの樂れ安あ
 山とまつるそ角いこつとゆ
 おのつる石ハ佛とをりか
 と解くくけハ食もこま
 刀 秀 房 芝 房 刀 秀 房 芝

家もらとくあおの極よあり
 三日まへうてそ気んそ
 老功乃つもれは療治ま
 ひひの竹^新洞^治叶ぬ縄法
 谷川の西縁ハ久しき花盛
 ひしうま入きり物脊と干
 刀 秀 房 芝 房 刀 秀 房 芝

花みぢふ屋うゝあれは只あそ

まきとくいゝまは雄の侍居

ぬもむとまの溜まや惚あん

あろへら押と旅乃まれこと

月のねもよれあゝる狂人の怪

影しられそ秋まうま張

紅石

惟然

玄栴

魯中

宛

石

花みぢふ

三六

石分よあうした枝は標のりま
 ありまひ毎は所注い入
 踏ゆして足れ脚標のたき
 このむつーと痛さーと泥
 何きとーみのはをひえれ
 半あつこくききと糸乃標
 井のをもとれあはハ潔な後
 大花狂ふ夕月のりき
 中 然 石 然 中 石

秋ふくまてゆるりとあま
 もとやこくー此米の出来り
 捨あまハ^笑あひとかりぬ張つて
 かけまきこくーとある芳乃火
 ナ
 かののれとれへと風の介れ
 つーとと鳥取田は仕業し
 けやたる年をハ人ウサ
 毛のーと張れてあう目のあ
 中 梅 然 石 然 中 石

平岸の女々々 障子の中ぬり
 ありとありぬく 芋味^{トチ}のいし
 石くは 桔梗も花の咲くを
 をゆるる月の影中をさへ
 初層の障子ぬきで備^{あひ}
 とのまの袴をぬきとみぬ
 又して女志^{あは}うれあ^あ
 な^はと^はしてし言てあ^あぬ^あ

中 石 然 中 梅 然 石

幸^り旅 離ハ山外堂の浦せけ
 む^いる^る 土^つつ^つ 地^こ 塊
 靴なれハ月^しと^あを^さり^返
 も^もと^もの^もる^る 薪の^後 入
 二三日 居やれ 旅を^とれ^た 盛
 子を^交り^て 萩の^長 岡^さ

中 梅 然 石 梅 中

玄梅

揚子江ハ東内初や順終川

一とこの免ハ教^モるをめぐ^ク 鬼市

去^レ年よ^モ常^モ此^モ昔^モの^モり^モか^レり 紅石

か^レら^レら^レる^モの^モを^レ川^レて^レさ^レら^レる^モ 志葉

有^レ明^ノの^レ教^モと^モ南^レ北^ノ相^レと^レや^レし 栄枝

此^レあり^レこ^レも^レい^レて^レハ^レ錦^ノの^レあ^レえ^レたま 蔵人

お撲場のくはれて留る目^ウはと
 家^ウのまことり満き河^ウのたけ
 猿引の綿さーむさくあられ
 一^ウありき尻のきまうま
 咲^ウりる牡丹ちる花をもつて見る
 法^ウ粋ころや人よいそれし
 玉^ウう花も凡うあき例て破くを
 目^ウらんちころり物こそく見世
 市 梅 枝 人 石 葉 梅 市

十六夜とあつ通あてなれ志^ウは
 よいころきし 後の彼^ウ岸
 花のころきさる布子持もきて
 せきころよはにものころれぬ
 分^ウあそよまかると舟のころ^ウあ
 きころ^ウ舞^ウよむの付きり
 か^ウころきあしあしぬる相^ウ助
 藤^ウま^ウ花^ウの^ウ宿^ウて借^ウ居
 石 人 梅 葉 人 枝 葉 石

つまむものぞくものぞく人市
 香のつたれこもりこもり
 どりしとも思ふよき月の
 先かたきこしハの箱こり
 よもぬいたまこなれし
 とつとも志すぬ雑木鏡
 今更より念仰のときれ
 かくむちをきて業は定ぬ
 市 枝 人 石 葉 梅 枝 市

裏口そのやげハ花よけの葉也
 銀りきこひて多賀へまの
 誰り来きもあしも忘れぬ
 五木のなかまを喰るやきめ
 かへたまよきも花場の花に
 葉乃あふふ乃あれま
 石 梅 市 人 枝

鳥之居集 終
 南寺町二条七町
 舟筒屋 店云馬板



